高山の文化を高めた人々 63

高山市民憲章を起草

白川　初太郎

中林　利数

「文字とことばをやさしくするために」という本があることをご存知だろうか？

高山市名田町五丁目、昔の南小学校、今のＮＨＫ高山支局の真っ正面にあった内科医白川医院の院長、白川初太郎氏が書いた。

この本を読んだ人は少ないと思うので、少し引用しよう。

「人という漢字は、やさしく分かりやすく、世界一よい字だと思う。」で始まり、「私は大正末期医科大学生の頃、むづかしい漢字の医学術語を書くのが苦手であった。例えば「くさめ」は噴嚏、「むねやけ」は呑酸嘈囃、「おなら（フラーツス）」は扶羅都斯、と書いたのである。このような術語をもっと簡単な字に、そしてやさしいことばにしたならば、基礎の学問の修学能率が上がるから改めた方がよいと思った」と続く。

全く同感である。文章の中に漢字が多いと、全体に重々しく、固く、エラそうで、威厳に満ちてもっともらしくなる。しかし、度が過ぎると、何のことかさっぱり分からなくなる。

漢字の多い小むづかしい文章は、官庁の文書に多い。元に法律用語が引用されているから、読んでいるとこっちは司法試験を受けているのではないかと思わされることがある。公務員暴行陵虐致傷罪なんてすぐ書けるだろうか？

仮名は漢字を簡略化したもので、正式文章は真名の漢字で書くべし、というような心得が律令制度の昔からあったのだろうか？

もう一つはお寺のお経。あれは仮名なしの全面的漢字の世界。インド語を漢字の音で表し、それを日本語で読むとサッパリ分からなくなる。ギャーテイギャーテイ、ハラソーハーというような。

要は漢字と仮名の配分だろう。新聞の紙面が分かり易いのは、その辺の配慮が行き届いているからだ。漢字を多く使えば字数を減らせるから、限られた紙面に内容を多く盛り込める。しかし、それでは紙面が真っ黒になってしまう。お経の本のように。もっとも何のことか分からない方がありがたい、というなら話しは別だ。

白川初太郎氏は、医師で俳人。俳人であって漢詩人ではない。だから、漢字に縛られなかったのだろう。そんな人だから、国際語であるエスペラント語を普及させようとしていたのだろうか。しかしなぜエスペラント語なのか、私には分からない謎の一点。

（編注）エスペラント語：一八八〇年代に創案された、国際補助語を目指して作られた人工言語。国や人種に関係なく会話できることを目指して作られており、全世界で百万人ほどが話すと推定される。

氏が起草委員長で作られた「高山市民憲章」は、今も生きている。ちなみに、その時の高山市民憲章推進協議会起草委員の皆さんは、白川初太郎、畑中裕作、橋本ひな子、大野政雄、須田圭三、漆山潔、高桑了英の各氏である。

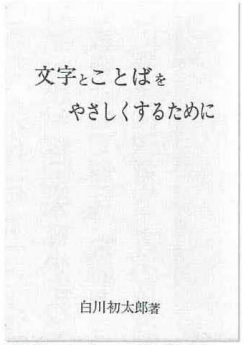
高山市民憲章

わたくしたちは乗鞍のふもと、
山も水もうつくしい飛騨高山の市民です。
・うつくしい郷土に生きるわたくしたちの期待とねがいをこめて、この憲章を定めます。
・全市民は力をあわせて、この憲章を守り、理想のまちを建設しましょう。
たがいに信じ、助けあい、
心のなかにもきれいな花を咲かせましょう。
環境をととのえ、きまりを守り、
みんなのしあわせを大事にしましょう。
からだをきたえ、元気で働き、
明るい豊かなまちをきずきましょう。
文化をたっとび、伝統を生かし、
正しい教養を身につけましょう。
こどもを愛し、健やかに育て、
夢と誇りをもたせましょう。

昭和四十一年十一月一日　制定

かスカトールという気体であり燃えると聞いて、集めて燃やす実験をしていたという、町内の同級生の証言がある。扶羅都斯（おなら）でも何でも、科学的に冷静に見つめようとした態度が、やがてノーベル賞に繋がったのだろうか。

文字とことばは、やさしい方がいい。



昭和55年12月発行

白川初太郎

明治三十四年生～昭和五十八年没、医師・俳人。東京生まれで号は青山人。

千葉医科大学卒、東京帝国大学で細菌学と血清学を研究。戦時中は、ビルマ派遣軍防疫給水部長などを務め、軍医大佐で終戦。昭和二十一年に高山市内に開業。高山ユネスコ協会会長、高山善意銀行頭取、高山市民憲章起草委員長、エスペラント語講師などを歴任。

俳句、書、篆刻など多趣味。

昭和四十八年
（社）日本善行会善行銅賞

昭和五十四年　日本医師会長表彰

昭和五十六年　高山市文化協会文化功労章

（飛騨人物事典より抜粋）

ご存知、長男の白川秀樹博士はノーベル賞受賞の学者。子供のころからのナイロンに電気を通す夢が、やがて実現した。

秀樹博士は子供のころ、屁は化学的にはインドール と